

徒歩および自動車での移動による都市河川沿いを事例とした 景観体験の違いに関する研究

○上田知夏 [東京農業大学] △栗田和弥 [東京農業大学]

景観体験は、自然環境をはじめとする空間における非日常性の視覚を中心とした体験とも換言できる。余暇活動のひとつとして旅行に出かけ、自然風景地を眺めることは、日常から脱して景観体験を実施しているということになる。景観を楽しむことは展望台や露天風呂から眺めるように視点が固定されている場合もあるが、移動を伴いながら行う場合も少なくない。近年は「ドライブ」としてマイカー利用の移動が休日を中心に多くなり、他方で健康面にもより気遣うようになり「歩く」こと（徒歩）への関心は高まっている。地域の歴史・文化を理解したり、自然とのふれあいを行う場合、一般論としてはドライブ等よりも徒歩（散策等）の方が優れているとは想像できるものの、実際に比較した研究は見当たらない。そこで本研究では、東京・世田谷区内を流れる比較的大規模な河川である多摩川と、国分寺崖線の斜面緑地も多く比較的小規模な丸子川（六郷用水）の2つを対象とし、大学生を被験者として、徒歩および自動車の2つの交通手段で移動しながら、川や自然などを眺めた時の印象やその数量について把握した。距離を一定にするのみならず、景観体験の時間を均一にした場合の違いについても分析を行った。

環境 NPO の趨勢に関する研究 ～2008 年度における実態を設立年からみる～

○岡村雄太 [東京農業大学] △栗田和弥 [東京農業大学]

わが国において、環境保全活動を主たる目的とする組織、または主たる目的ではないものの活動目的の一つとしている非営利の組織（以下、環境 NPO とする）は数多く存在し、自然環境の管理の担い手として重要な役割を果たしていると考えられている。

しかしながら、特定非営利活動法人（NPO 法人）としての格を有さない環境 NPO に関する実態の把握はほとんどなされておらず、未知な部分が多い要因としては、(1) 環境 NPO は（NPO 法人であっても、規約・総会・社員等の登録情報以外は）情報発信する義務は必ずしもないこと、(2) 環境 NPO の活動規模等が比較的小さいと考えられるため情報を提供するまで至らないこと、(3) 環境 NPO 内の活動内容の充足によって敢えて広く伝達を行っていない、等の理由が考えられるが、その趨勢を明らかにすることは、今後の自然環境保全活動において有意義なものであるといえる。

情報が少ないとはいえ環境 NPO に関する調査を 1996 年から実施している、環境再生保全機構（調査開始当初は環境庁による）『環境 NGO 総覧』のデータベースがあり、全国的な傾向をとらえているので、環境 NPO の設立年を基軸に分析を行った。